

小倉百人一首（おぐらひやくにんいっしゅ）

鎌倉初期成立の歌集でもっとも親しまれてきた〈百人一首〉。藤原定家撰。1235年(嘉禎1)成立か。古代から平安時代を経て鎌倉時代初期までの有力歌人100人を選び、それぞれの和歌1首を掲げたもの。歌はすべて《古今集》以下の勅撰集を典拠としている。本の形でも伝わるが、近世以後、〈歌がるた〉として愛好され、かるたの呼名としても定着した。1235年、宇都宮頼綱(定家の子為家の妻の父、法名蓮生)は山荘の障子に貼る色紙和歌の選定と執筆を定家に依頼し、定家は《百人秀歌》(後鳥羽院、順徳院の歌を欠くなどいくつかの相違はあるが《小倉百人一首》と骨子は同じ)を編集、のちそれを改訂して成立したものとされるが、異説も多い。この経緯には、幕府の圧力によって《新勅撰集》に後鳥羽院の歌を入れられなかった定家の不満がからんでいとされる。作者は、天智、持統、人丸(人麻呂)に始まり、定家、家隆、後鳥羽、順徳に至る。男性歌人79(うち僧侶13)、女性歌人21。内容別では、春歌6、夏歌4、秋歌16、冬歌6、恋歌43、旅歌4、離別歌1、雑歌20で、恋の歌がきわめて多い。歌の選び方は必ずしもそれぞれの代表作とはいえないが、定家の好みがよく表れていて、優雅・流麗な作が多いとされる。王朝和歌のアンソロジーとして室町時代ごろから重視され、現代に至るまで愛好者が多く、かるたとして楽しむことと相まって古典に親しむ契機となっている。なお、《小倉山荘色紙和歌》と呼ばれて伝わる定家筆の色紙和歌(小倉色紙)は、《明月記》に、天智以来家隆、雅経に至る歌人の歌を色紙に書いて蓮生に送ったとあることと対応するものとされるが、その段階で《小倉百人一首》が成立していたか、《百人秀歌》の段階のものか議論があり明らかではない。

百人一首（ひやくにんいっしゅ）

〈ひやくにんしゅ〉ともいう。100人の歌人の秀歌を1首ずつ集めたもの。またそれをかるたにしたもの。通常は藤原定家撰《小倉百人一首》をさすが、足利義尚撰《新百人一首》をはじめ、後世その形式や方法にならったものが数多くつくられた。《小倉百人一首》は、室町時代以来歌学宝典として尊重されてきたが、歌仙絵として100人そろったものは、鎌倉・室町両期を通じて見つかっていない。頼阿の《水蛙眼目(すいあがんもく)》の序によれば、歌仙絵入りの百首が定家の嵯峨山荘にあったかのようなのであるが、この序文は一般に疑問が多いとされている。江戸時代に入ると歌仙絵が画帖に描かれるようになり、版本も多数刊行された。《百人一首像讚抄》のように、百人一首の注釈書も江戸時代を通じて絵入本の形で出版された。歌仙絵としては、このほか社寺の扁額にもかかれるほど庶民の目に触れる機会が多くなり、《小倉百人一首》はかつての二条家秘伝の宝典という地位から歌の入門書、一般教養書という性格が変わり、《女大学》の類の版本には必ず絵入りで載せられた。手習いの手本としても、江戸時代以来よく使われている。この百人一首の大衆化は歌がるたの普及によっていっそう進んだ。歌がるたは、16世紀にポルトガル人がもたらしたというカルタの流行を見て、京都の公縁が貝覆(かいおおい)の貝を紙に替えて、南蛮カルタあるいはその日本産ともいふべき天正かるたと同じ形状のものを経師屋につくらせたことに始まるという。現存最古の百人一首かるたは、元和年間(1615 - 24)の道勝法親王筆によるものといわれている。初め手描きであった百人一首かるたも、元禄(1688 - 1704)ころには木版彩色の庶民向きのものがつくられるようになり、読み手が声を出して上の句を読み、他が取り手となって下の句の札を取るといった、現在に近い遊び方となったようである。一方には尾形光琳や谷文晁といった一流画家の手になる豪華な百人一首かるたもつくられたが、元禄ころから江戸時代の終りにかけて、俳句、川柳をはじめ各種の江戸文学に登場する百人一首はすでに庶民のものであり、落語にもとりあげられた。やがて正月の遊びにもなり、明治に入ると盛んにかかるた会が開かれるようになった。なお江戸時代中期には笛博用の〈むべ山かるた〉という一種の百人一首パロディもつくられて、明治時代まで遊ばれた。古典としての《小倉百人一首》も19世紀にはディキンズ F. V. Dickins の英訳や、そのほか漢訳までつくられて、海外にも知られるようになった。